
お題小説（砂、筋肉、接続、異常な愛）

めぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お題小説（砂、筋肉、接続、異常な愛）

【Nコード】

N4328BA

【作者名】

めぐ

【あらすじ】

小さな電球の明かりしかない部屋で、男は女に語りかける。

（前書き）

こぐまレンサを読み終えた直後にちょうどいいお題が転がっていたので書きました。

ろくにしこーじ先生の書く漫画「すべてに射矢ガール」「こぐまレンサ」はどちらも名作です。こんなSSを読む時間があつたら今すぐアマゾンで検索し、ポチることをオススメします。

毎週決まって日曜日、いつも君は一人バスに乗って砂浜まで来ると、寂しげな表情で海を眺めていたね。

初めてその姿を見たとき、僕は君がそのまま海の中に入って自殺するんじゃないかと思ったよ。

でも君は、空に星が瞬く時間になっても、ただひたすらに海を眺め続けた。そしてここを通る最終バスに乗って去っていった。

その日から、毎週欠かすことなく、君はここに来て、砂浜に腰を下ろし、飽きることなく海を眺めた。

君はもちろん知らなかっただろうけど、僕はその姿を上部屋の部屋からずっと見ていたんだ。そう、君が海を眺めているように、ずっとね。

なぜすぐに閉じ込めなかったのか知りたいかい？

それはね、単純なことだよ。この部屋に先客がいたんだ。君を初めて見たときはね。

僕が人を閉じ込めるのは君が初めてじゃないと知ってびっくりした？

あんまり驚いてくれないんだね。残念だよ。まあいいか。

いつもはこの部屋が空っぽになると不安になるんだ。早く次を見つけないとってね。

でも次の日曜日には君が砂浜にやってくる。その確信があったから、僕はいつもとは逆に凄くワクワクしてたのを覚えてるよ。

後ろからバットで殴って気絶させ、ここに君を連れてきた時、なかなか目を覚まさないから心配したっけ。

何人も同じ方法でやってきたから、力加減は自信はあったんだけどね。もしかしたら浮かれすぎて、力を入れすぎたかなってさ。

だから、君が目を目覚ましてくれた時は本当に嬉しかった。でもそれを悟られないように僕はそっけなく『餌だ』とだけ告げ、持って

きた食事を君の前に置いて部屋を出た。

外の世界じゃ知らないけど、ここではミステリアスに必要なこと以外は喋らない。これがコミュニケーションのコツなんだ。

この真っ白で電球以外は窓も時計も何もない部屋に、片足を床に鎖で繋がれ、今まで過ごしてきた世界との接続を遮断される。

会ったことのない男が日に三回、原料が特定できないほどドロドロに煮込んだ食事を持ってくる。

話す言葉は『餌だ』の一言。

こうするとね、大体最初は持ってきた食事には手をつけないんだ。まあ見た目ドロドロだし、二日くらいなら人間何も食べなくても我慢できるよ。

食器を片付けに来ると、彼女達は毎回怖い顔して言うんだ。『なんでこんなことをするの！』『あなたの目的はなに！』ってね。

僕はその問には答えない。ただ『餌だ』と彼女達に告げ、部屋を出る。

二日。長くて三日過ぎると、最初は元気のあった彼女達も腹ペコになって喋らなくなる。そしてやっと僕が持ってきた食事を食べてくれるんだ。

僕はご褒美として蒸しタオルを一本持ってきてあげる。流石にただ寝ているだけでも、お風呂に入らないと臭いからね。

お腹がいっぱいになって元気になると、彼女達はまた喋りだす。でも今度は怒鳴ったりはしない。優しい声で同じセリフを言うんだ。もちろん僕は答えない。こうすると、彼女達の言葉がだんだん変わってくる。『あなたの名前は？』『歳はいくつ？』なんて具合にさ。

で、やっぱり僕は答えない。するとまた変わるんだ。今度はどう変わると思う？

彼女達は聞いてもいないのに自己紹介を始めるんだよ。自分はどうんな家庭で生まれて、どんな人生を送って、どんな恋愛をしてきたって。そして最後に『次はあなたのことを教えて』ってね。

誰が教えるかってんだ。彼女達は僕のことなんてこれっぽっちも興味ないんだ。ただ、理解したフリをしてなんとか逃げ出そうと考
えてるだけなんだよ。だから僕は答えない。

ここまでの段階はみんな比較的早いんだ。次はちよつと時間がか
かる。

最終的にはみんな諦めるんだ。逃げ出すことをさ。結構個人差が
あるから具体的に言葉がどう変わるかは言えないけどね。

そこまできて、彼女達は本当の意味で僕を求め出すんだ。天井の
電球以外は窓もなく、白い壁と鎖しかないこの部屋で、唯一言葉が
通じる人間の僕を話し相手としてさ。

こうして僕はやっと彼女達と本当の会話ができるんだ。最高に楽
しい瞬間だよ。

でも、それも一瞬。

しばらくすると彼女達の心に雑念が混ざってくる。もしかしたら
外に出れるかもしれないって。そうなったらもうその子は終わりだ。
今日殺そうと思ったときに僕は最後に聞くんだ。二人で行きたい
ところはないかいってね。

あなたがいればそれでいい。そう言ってくれたら僕は殺さないで
解放しようとも思ってる。でも残念ながら、まだその言葉を言
ってくれた子はいないよ。

僕のことを異常だと思うかな。でも僕は君の方が異常だと思うね。
君は今までの子と全然違った。まず僕が持ってきた食事を最初か
らためらうことなく食べた。毒が入ってるとか考えなかったのかい？
次に君は、僕に何も言わなかった。三日たっても、一週間たつて
も、一ヶ月たつても一言も喋らない。

足かせを手で持ち上げ、鎖に叩きつける。君はそれをひたすらに
繰り返した。別に監視カメラで覗いていたわけじゃないけど、君の
腕の筋肉とその鎖のキズを見れば一目瞭然だ。

いつまでたつても君は諦めない。あんな寂しげな表情で海を眺め
ていた君を突き動かすものはなんなのか、上の世界になんの未練が

あるのか僕は凄く気になった。

何度君にそれを聞こうと思ったことか。でも僕は必死に我慢した。だってなんだか負けた気分になるじゃないか。

君が諦めないなら僕も諦めない。僕は鎖のキズが深くなるのをじっと待った。

あと少しで千切れそうだった時、食事に催眠薬を仕込む。次に眠っているうちに新しい鎖と取り替える。

そうしたら君だって諦めると思ったんだ。なんせ約六ヶ月はかった成果が一瞬で水の泡だからね。

しかし、鎖が切れるよりも早く溶接したナットが外れるとは思わなかったよ。もしかしてこれを最初から狙ってたって言うなら、僕は完全に騙された。

引き篋もりの僕なんかより、毎日重いものを持ち上げてた君の方がよっぽど力があつた。食事を持ってきた僕を壁に押し付け首を絞めるなんて簡単だったかな。

君はとても嬉しそうな顔をしてたね。僕はあの時本当に死ぬと思つたよ。

きつと向かう先は地獄だと覚悟した。けど目を覚ますと見慣れた真つ白な部屋。鎖の先に君はいない。代わりに僕の足に新しい鎖が繋がってる。

僕は嬉しいよ。やっと君の声が聞けてさ。君の声は想像してた通りのとても綺麗な声だった。でも、できればもっといろんな言葉が聞きたいかな。

僕のことはこれ位にして、今度は君のことを聞かせてよ。君は何で諦めなかったんだい？

いや、そんなことより僕はもっと知りたいことがあるんだ。君は海を眺めて何を考えてたか。そして今、何を考えて僕に餌を持ってくるのか。

あれ、もう行っちゃうの？

もしかして、全部聞けて満足しちゃった？

（後書き）

最後まで読んでいただいた人にもう一度。

ろくにしこーじ先生の書く漫画「すべてに射矢ガール」「こぐまレ
ンサ」はどちらも名作です。こんなSSを読む時間があつたら今す
ぐアマゾンで検索し、ポチることをオススメします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4328ba/>

お題小説（砂、筋肉、接続、異常な愛）

2012年1月11日17時45分発行